

平成 22 年 4 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18300293
 研究課題名（和文） 参加体験協同型のワークショップを e ラーニングで可能にするための統合的研究
 研究課題名（英文） An Integrated Study on E-Learning that enables Participatory and Collaborative Workshop
 研究代表者
 向後 千春（KOGO Chiharu）
 早稲田大学・人間科学学術院・准教授
 研究者番号：00186610

研究成果の概要（和文）：本研究は、参加体験型のグループ学習の形態で実施されるワークショップを、e ラーニングによって可能にするための基礎的研究および実践的研究を行おうとするものである。具体的には、e ラーニングと対面によるワークショップ的なグループワークを組み合わせたブレンド型授業を設計し、その効果を検討することを目的とした。その結果、ブレンド型授業の学生による評価は高かった。このことは、すべてを教室授業で行う形態から、e ラーニングを取り入れたブレンド型授業に移行した場合でも、授業満足度や授業の良さを損なう可能性は低いということを示唆するものである。

研究成果の概要（英文）：This study aims to enable e-learning to integrate participatory and collaborative workshop. Blended online courses including e-learning and face-to-face workshop were designed and performed, then students evaluated those courses. The high appraisal to the blended courses indicates that face-to-face courses can be replaced by blended e-learning courses with students' high satisfaction.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,900,000	0	1,900,000
2007年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2008年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
年度			
総計	8,100,000	1,860,000	9,960,000

研究分野：教育工学

科研費の分科・細目：科学教育・教育工学／教育工学

キーワード：e ラーニング，ワークショップ，参加，体験，協同学習

1. 研究開始当初の背景

e ラーニングを実施、運営するための環境は整いつつあり、これからますます多くの教育が e ラーニングの形態によってなされるようになることが予測されている。しかしながら、現在実現されているのはレクチャーの配

信、BBS でのディスカッション、オンラインテストによる評価とフィードバックといったような直線的で比較的システム化しやすい形態での教育である。

一方で、協同学習や協調学習といった学習者同士のインタラクションやグループとし

での学習活動が注目されているが、そのeラーニング上での実現にはまだ越えなければならないハードルがたくさんある。その典型的なものが、ワークショップである。つまりワークショップがeラーニング上で実現できるようになれば、少人数でのゼミや演習などの形態の教育がeラーニング上で実現できることになる。

これまでのeラーニングでは知識やスキルに関しては、その伝達と習得を可能にしてきたといえる。しかし、学習者の態度や信念を変えるところまではいっていない。一方、ワークショップの形態は参加者の態度や信念を結果的に変えるような深い影響力があることがわかってきた。これをいかにしてeラーニングシステムで実現することができるかが、これからのeラーニングの課題だといえる。

2. 研究の目的

本研究は、参加体験型のグループ学習の形態で実施されるワークショップを、eラーニングによって可能にするための基礎的研究および実践的研究を行おうとするものである。

まず、基礎的な研究として明らかにしたいことは、集合して同時に数十人が参加して行うワークショップにおいて、どのようなコミュニケーション活動が行われ、それがどのように全体としての活動や意識に働きかけ、ワークショップ独特の盛り上がりと日常に戻ったときにも思い出されるような深い体験（アンカー体験）を生み出すのかというプロセスの全体像である。

次に、実践的研究として行いたいことは、そうしたワークショップをeラーニングシステム上で実施するためのプログラムを開発し、実際に参加者に協力してもらいeラーニングワークショップを実施したときに、そこでどれだけのワークショップ的体験が実現できるかを検討することである。

しかし、これを実現するためには、まだまだICT環境が整っているとは言えない。したがって、本研究では、eラーニングと対面によるワークショップ的なグループワークを組み合わせたブレンド型授業を設計し、その効果を検討することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) eラーニングをワークショップ的にする研究

一般的に孤独感が学習離脱の大きな原因となっているeラーニングに対して、どのようにすれば学習が促進、持続されるかという問題意識を持って、eラーニングをワークショップ的にする研究を進めた。その1つの工

夫が、受講生と教員・メンターが個別に授業の感想や質問をやり取りできる「レビューシート」という機能である。これを実際にeラーニング授業で利用したものを評価した。

(2) ワorkshopそのものの分析

eラーニングをワークショップ的にするためには、実際のワークショップの中で何が起きているかを観察し、分析しなくてはならない。ワークショップそのものが全体論的な立場で設計されているものであるため、それを細かいデータを取った上で全体的に何が起きているのかを検討しなければならない。これについては方法論的にも発展途上にあるものであるが、まずはパイロット的なデータを取って分析をした。

(3) eラーニングとワークショップをブレンドする授業実践

これまでの研究で明らかになっていることは、eラーニングやワークショップの単体の授業よりも、それらを組み合わせたブレンド型授業の方がより効果的であるということである。eラーニングは知識教授中心のものであれば効率的ではあるが、それが行動レベルに至るまでにはなりにくい。一方ワークショップでは、体験や他者との交流をとるため深い理解には至るが、時間や身体的なコストが高い。そこでこれらの両者を組み合わせたブレンド型授業の可能性に注目する。実際にブレンド型授業の実践を通じて、その実証的なデータを取った。

4. 研究成果

(1) eラーニングをワークショップ的にする研究

ここで使われたシステムは、毎回の授業を受講したあとに、学生が授業の感想や質問、あるいは雑談などを書き込むことによって、教員・メンターに個別に届けられるものであった。教員・メンターはそのメッセージに対して、メールと同じように個別に返事（フィードバック）を送ることができた。これを「レビューシート」と呼び、実際にeラーニング授業の中で使用した。レビューシートはおおよそ5~10分の時間を使って、平均200字程度の長さで書かれていた。その効果は次のような点にまとめることができた。

・心理的距離を縮める

気軽に書ける、心理的な距離が縮まる、BBSよりも書きやすい、という点でレビューシートは高い評価を受けていた。このように、レビューシートに気軽に授業の感想を書くことで、教員・メンターを含めた授業全体に対して親近感を持った。

・フィードバックの効果

返事があるとうれしい、返事があるとモチ

ベーションが上がる、という点でも、レビューシートは高い評価を受けた。これはフィードバックの量もタイミングもちょうど良いと評定されたこととあわせて考えると、フィードバックが適切に行われているという条件下ではフィードバックの効果が高いと推測される。

・授業内容の定着

授業内容を整理できる、考えを深めることができる、という点については、そこそこの評価を受けた。これは、質問と内容のまとめが書かれる頻度がそれほど多くないことから裏づけされる。とはいえ、授業内容の定着という点でも、レビューシートは促進的な効果を及ぼしていると考えられる。

・レビューシートのネガティブな側面

忘れそうになる、書く内容に困る、負担に感じる、必須でなければ利用したくない、といった、レビューシートに対するネガティブな反応は、総じて低いものであった。

(2) ワークショップそのものの分析

これまでに行われたワークショップの分析および、本研究で実施されたワークショップの分析から、次のようなことが明らかになった。

学習活動における権威を不在とすることによってワークショップが設計できる。ここでは全体の予測と制御は不可能である。しかし、複数のファシリテーターが全体の方向性をたえず連絡し合い、全体を自発的に動かすことによってワークショップが成立する。ここでは、これまでの教育工学的な考え方はまったく別の見方が必要になってくるだろう。

(3) e ラーニングとワークショップをブレンドする授業実践

受講者数が100人を超える大規模な大学の授業を、e ラーニングと教室授業を隔週で交互に実施する形態で実施した。e ラーニングによる知識と概念的な理解と、教室授業によるディスカッションと体験的な学びを組み合わせることによって、より効果の高い授業を目指した。最終的な授業評価アンケートの結果から、こうしたブレンド型授業がどのように学生に受け取られているかを検討した。

その結果、次のことが明らかになった。

今回のブレンド型授業は学生に好意的に受け取られていることが明らかになった。また、同じ授業内容を受けるとしたときにブレンド型を選択する学生は過半数を占めた。このことから、将来的な大学授業の形態は徐々にeラーニングを取り入れていくものになることが予想される。

成績群によるブレンド型授業の好みについては両科目について有意差は見られな

った。このことから、ブレンド型授業の採用については特段の配慮が必要であるとは考えられない。

もともとeラーニングあるいは対面型授業を好む学生は、今回のブレンド型授業をどう評価しているのかについて検討した結果、両方の科目について、満足度、良さ評定ともに、ブレンド型>教室授業>eラーニングの順で高い評価を受けていることがわかった。このことは、すべてを教室授業で行う形態から、eラーニングを取り入れたブレンド型授業に移行した場合でも、授業満足度や授業の良さを損なう可能性は低いということを示唆するものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- (1) 伊豆原久美子・向後千春(2009.12) eラーニング授業におけるレビューシートの利用が授業評価に及ぼす効果 『日本教育工学会論文誌』Vol.33(Suppl.), Pp.53-56 (査読あり)
- (2) 向後千春(2009) 生涯学習のニーズに対応する eラーニング大学 『メディア教育研究』Vol.6(1), Pp.S26-S33 (閲読あり招待論文)

〔学会発表〕(計6件)

- (1) 富永敦子・高崎亜希子・向後千春(2009.8) eラーニング指向性とグループワーク指向性との関連 『教育システム情報学会第34回全国大会講演論文集』Pp.350-351
- (2) 向後千春・伊豆原久美子(2009) BBSを利用したグループワークの実践と改善点 『教育システム情報学会第34回全国大会講演論文集』Pp.254-255
- (3) 向後千春(2008.10) ICTを活用した教育システムをどのように評価するか 『日本教育工学会第24回全国大会講演論文集』Pp.85-86 (2008/10/11~13, 上越教育大学)
- (4) 向後千春(2008.9) eラーニングと教室授業のブレンド型授業の実践と評価 『教育システム情報学会第33回全国大会講演論文集』pp.90-91 (2008/9/3~5, 熊本大学)
- (5) 筒井洋一・向後千春・青木将幸・中村恵子(2008.6) 授業方法としてのワークショップとe-learningの意義 『大学教育学会第30回大会発表要旨集録』Pp.48-49 (2008/6/7, 目白大学)
- (6) 向後千春(2006.11) 実質的な成果をもたらすeラーニングの条件 『日本教育工学会第22回全国大会講演論文集』Pp.9-12 (2006/11/3~5, 関西大学)

〔その他〕

研究会発表（計4件）

(1)向後千春（2008.12）閉じられた大学授業から持続可能な学習コミュニティへ『日本教育工学会研究報告集』JSET08-5 Pp.203-206

(2)向後千春・伊豆原久美子（2008.7）eラーニング授業における学生レビューシートの利用とその効果『日本教育工学会研究報告集』JSET08-3 Pp.81-88

(3)向後千春（2007.12）eラーニング授業でコミュニケーションカード「e大福帳」を使う『日本教育工学会研究報告集』JSET07-5 Pp.297-300

(4)向後千春・伊豆原久美子・富永敦子（2007.3）授業アンケートから「授業レビュー」の方法へ『日本教育工学会研究報告集』JSET07-1 Pp.171-176

6．研究組織

(1)研究代表者

向後 千春（KOGO CHIHARU）
早稲田大学・人間科学学術院・准教授
研究者番号：00186610

(2)研究分担者

筒井 洋一（TSUTSUI YOICHI）
京都精華大・人文学部・教授
研究者番号：20197734
鈴木 克明（SUZUKI KATSUAKI）
熊本大学・社会文化科学研究科・教授
研究者番号：90206467
中村 光伴（NAKAMURA MITSUTOMO）
熊本学園大・社会福祉学部・准教授
研究者番号：40352398
辻 義人（TSUJI YOSHIHITO）
小樽商科大・教育開発センター・助教
研究者番号：80400076